

博士學位論文審査要旨

2013 年 1 月 9 日

論文題目： トマス・アキナスにおける聖書註解の研究

学位申請者： 保井 亮人

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 中山 善樹

副 査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫

副 査： 神学研究科 教授 石川 立

要 旨：

トマスの聖書註解はその全著作の六分の一を占める重要なものであるにもかかわらず、従来、我が国においてはもとより世界的にも本格的に研究されてこなかった。著者はその卓越した語学力と思索力をもって果敢にも、重要な聖書註解である『ヨブ記註解』、『ヨハネ福音書講解』、『ロマ書註解』をとりあげ、それらを強靱な主体的思索で解釈することによって、この研究史の間隙を埋めることに成功している。このことは将来のトマス研究にとって新しい局面を開くものであろう。ここに本論文の意義がある。

第1章においては、本研究の導入として信仰が主題化され、ここでは、まず信仰が見えざるものに対する確実性を伴う意志による同意であることが確認される。次に神は場所的なものとしても、世界の一部としてでもなく、万物の作出因ないし保持因として世界に内在することが明らかにされる。

第2章においては、信仰にもとづいて生きる人間に働く神の摂理が論じられる。まず摂理の一部分である予定が扱われ、予定の根拠や人間の自由の問題が問われる。すなわち人間の自由意志は一次的に働くものとしての神の意志に根拠づけられているが、神は人間の自由意志のあり方を毀損することなくそれを動かすことが論じられる。したがって人間に生起する出来事は偶然や運命に帰せられるのではなく、神の摂理によって支配されていることが確認される。

第3章においては、人間の救済が主題化される。それは愛と認識によるものであるから、まず神への愛が論じられる。次いで知性認識と救済の関係が問われ、われわれの知性認識がそのままキリストの光に与る営みであり、それ自体人間を全体として救済へと導くものであることが示される。

第4章においては、神の礼拝が主題化される。まず祈りが取り上げられ、善き祈りの条件が詳しく解説される。次いでわれわれは第一義的に霊的善を求めるべきであり、忍耐をもって隣人と協調して謙遜な心で霊的善を願うべきであることが明らかにされる。以上の考察より、基督教信仰の現代的意味が十全に理解されうるように構成されている。

以上によって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2013 年 1 月 9 日

論文題目： トマス・アキナスにおける聖書註解の研究

学位申請者： 保井 亮人

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 中山 善樹

副 査： 文学研究科 教授 宮庄 哲夫

副 査： 神学研究科 教授 石川 立

要 旨：

上記審査委員は、保井亮人氏に対する総合試験を 2013 年 1 月 9 日午後 1 時から約 2 時間実施した。

総合試験において学位申請者は、提出された論文の内容に関する口頭試問に対して適切に応答し、論文の意義とその研究水準の高さを明確に示すとともに、主題の背景となる哲学史的理解についても広範な専門知識を有していることも明らかにした。

また、語学試験（ラテン語、ドイツ語）においても学位申請者が研究上要求される読解力と運用力を十分に有することが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： トマス・アキナスにおける聖書註解の研究

氏 名： 保井 亮人

要 旨：

国内外を問わず、これまでのトマス・アキナス研究において、その聖書註解が取り扱われることはほとんどなかった。しかしトマスの聖書註解は、分量的に言っても、トマスの全著作の約6分の1を占めるものであり、トマスの全思想と方法を知るうえで欠かすことのできない資料である。本研究においては、トマスの聖書註解の主なものである『ヨブ記註解』、『ロマ書註解』、『ヨハネ福音書講解』の三つの作品を取り上げ、その中心的思想を考察したい。このことによって、従来のトマス研究に新たな局面が加わるとともに、本研究の主旨が信仰の現代的価値に関わるものであることからして、中世哲学研究全体にとってもその意義を認めることができるだろう。

第1章においては、本研究の導入として信仰が主題化され、第一に『ロマ書註解』における信仰の問題が扱われる。ここでは『ロマ書註解』105-108節の議論にしたがって、まず信仰が見えざるものに対する確実性を伴う意志による同意であることが確認される。しかし信仰は知性による承認を超えて愛によって完成されなければならない。したがって次に392節にしたがって、愛がわれわれに対する神の愛と神に対するわれわれの愛とに概念的に区別されながら論じられる。さらに愛によって完成された信仰と不完全な信仰とがいかに関係しているかが問われる。両者は実体において同一であって、ここに人格の統一性を見ることが出来る。最後に完全な信仰によるキリストの内住が635節にしたがって論じられるが、ここからして人間本性は信仰によって完成へと導かれることが示される。第二に愛は恩恵の概念からしても語られるものであるから、『ヨハネ福音書講解』における恩恵論が扱われる。202節における議論にしたがって、「その充実からわれわれは皆受けとる」(*de plenitudine ejus nos omnes accepimus*) という聖句の *de* が三つの仕方で解釈され、そこから後期トマスの恩恵論の特徴が抽出される。まず作出因を表す *de* であり、これによって恩恵の原因は神のみであることが示される。次に実体の共通性を表す *de* であり、これによって恩恵はキリストと実体をともにする聖霊に他ならないことが示される。最後に部分性を表す *de* であり、われわれは恩恵の充実からその一部分を分有することが分かる。以上より、後期トマスの恩恵論はきわめて神中心的であり、恩恵の概念が人間の側からではなく神の側から考察されていることが明らかとなる。第三はこのような信仰と愛を有する人間がいかに関世界と関わるかが問われ、『ヨハネ福音書講解』における神の世界内在が論じられる。まず神は場所的なものとしてでも、世界の一部としてでもなく、万物の作出因ないし保持因として世界に内在することが明らかにされる。次に創造の働きが考察され、神は事物の形相にとってもその現実性である *esse* を万物の最内奥で与えていることが示される。最後に神の世界内在はその力、現前、本質によるものであることが確認され、それに関連して神の意志の確実性、神の知の浸透性が論じられる。さらに補完的に第一原因と二次原因との関係が問われ、Rudi te Velde の見解をもとに、神が自然本性の働きのうちで働くのは、存在の超範疇的な原因として、自然本性におけるあらゆる範疇的形相と力をその内側から、存在をもって伝えることであると結論される。

第2章においては、信仰にもとづいて生きる人間に働く神の摂理が論じられる。第一に『ロマ書註解』758-795節に基づいて、摂理の一部分である予定が扱われ、予定の根拠や人間の自由の問題が問われる。まず予定に関する様々な見解が整理され、予定の根拠が出生や功德にあるのではないことが示される。ではいかにして神は人間を救済へと予定するのか。それはただ神の意志による。トマスはこのことを哲学的に説明して、自然物の形相とその働きが神によって規定されているように、人間を

救済へと導く恩恵の注入と使用もまたすべて神に由来するものであるとする。しかしこの神の支配は人間の自由意志とどのように関わっているのか。トマスによれば、人間の自由意志は一次的に働くものとしての神の意志に根拠づけられているが、神は人間の自由意志のあり方を毀損することなくそれを動かすのである。ではこのように神によって動かされる世界に悪が存在するのはなぜであろうか。神が善の原因であるのは自体的であるが、悪に関しては機会的原因であるにとどまり、道徳的悪の真の原因は人間の自由意志に求められる。最後に予定の意味が考察され、それ自体としては泥や塵に他ならず善である神にすぎない人間の悲慘と、神の栄光を映すことのできる器としての人間の尊厳が明らかにされる。第二に『ヨブ記註解』における神の摂理が考察される。まず人間に生起する出来事は偶然や運命に帰せられるのではなく、神の摂理によって支配されていることが確認される。次に人間の究極目的が問われ、人間の究極目的は将来の生にあるのであって、この世の生はそれに至る道に過ぎず、われわれは兵士や日雇い労働者のように生きねばならないとされる。この世の逆境に対しては、神に依り頼むことでそれを乗り越え、艱難や悪のうちにすら神の救済への意志を洞察しなければならない。われわれのすべての行為は神によって見守られており、人格的行為はこの神の義との関係性のうちで決せられる。このように神が摂理を働く人間の魂は不滅であり、それは無限の働きへと開かれた自由意志の力と不可滅の実体を認識することのできる知性の性質から証明される。最後に将来の生が語られ、神性の生命から人間もまた復活へと用意されたのであり、われわれは「神がすべてにおいてすべてとなる」境地へ達することができる。第三に『ヨブ記註解』に基づいて義人の生が考察される。まずわれわれにとって何が正しい生き方なのかが問われる。それは内的な自然法と外的に伝えられる法を遵守することによるものであり、そのような生を営む義人は時間的善と霊的善を享受しながら、神の摂理への信頼のもとに生を築いていく。また義人の平和は人間における霊肉の対立が知性の優位のもと神によって統一されるときに語られるものである。次いでこのような義人の生が神の知恵に由来する聖なるものであることが示され、神の知恵の追求は人間としての義務であることが明らかにされる。最後に義人の生を破壊する傲慢が最大の罪として語られ、傲慢な人間の不安定さと脆弱さが示される。

第3章においては、人間の救済が主題化される。それは愛と認識によるものであるから、第一に『ヨハネ福音書講解』における神への愛が論じられる。最初に神認識の可能性とその限界が明らかにされる。ここからわれわれ人間の愛の目標は神に存し、愛によって神に到達する道が示唆される。まず世界への愛から離れ自己に還ることで愛を神へと向けることが必要とされる。次にその神への愛は、それに対立するいかなるものをも許容できないほどに強いものでなければならず、地上的な愛情や死すらをも克服すべきであることが説かれる。さらにキリストがわれわれの内成長するためにわれわれは自己を卑小なる者とみなし衰えなければならない。加えて霊的善と時間的善の相違が語られ、時間的善はそれが所有されるとそれ以外のものへ向けてわれわれを欲求させ魂を充足させることができないが、霊的善はそれが所有されたときわれわれの欲求を充足させながらさらなる完成へ向けて渴望させることが示される。最後に神への愛の根源であるキリストの受肉と神への愛の目的であるキリストの栄光が考察され、われわれの神への愛がそのまま神の恵みであることが示される。第二に認識による救済に関して、『ヨハネ福音書講解』における救済論が論じられる。まず一般的に救済とはいかなるものであるかが問われ、それは宣教、良心と行為、教会、観想においてキリストに依り頼むことによってはじまることが明らかにされる。次により具体的に、救済は「聞くこと」という受動的契機と「学ぶこと」という能動的契機の二つによって構成されていることが示される。ここからは知性認識と救済の関係が問われ、われわれの知性認識がそのままキリストの光に与る営みであり、それ自体人間を全体として救済へと導くものであることが示される。最後に人間の闇とキリストの光が対照させられ、人間本性は知性によって完成されると同時に神へと従属することが示唆される。ここにおいて、賢慮を中心とするギリシャ以来の倫理的人間像と、愛ないし謙遜を中心とするキリスト教的人間像が総合されていることが判明する。

第4章においては、以上の議論の総括の意味を込めて『ヨハネ福音書講解』に基づいて神の礼拝が

主題化される。第一に祈りが取り上げられ、善き祈りの条件が詳しく解説される。われわれは第一義的に靈的善を求めるべきであり、忍耐をもって隣人と協調して謙遜な心で願うべきである。忍耐強く祈ることは人間本性の未完成さに由来するものであり、ここに時間的善を求める通俗的祈願との相違が明らかとなる。第二に愛が主題化され、愛そのものについて、それが徳の根源かつ目的であり、人間の価値そのものであることが示される。第三に平和の分析が行われ、神、隣人、自己自身に対する秩序を修練によって保とうとする戦いのうちに平和が実現することが示される。第四に至福、第五に宣教、第六にキリストの勝利が考察され、傲慢や欲望の追求をその特徴とする世に対して将来の至福を思い抗うべきことが示される。最後に神の慈悲が、神の摂理の神秘と人間本性についての観想において論じられる。以上の考察より、信仰の現代的意味は十全に理解されると思われる。